

ヘルスマーター

RSウイルス母子免疫ワクチン

RSウイルス感染症は乳幼児に多くみられる呼吸器感染症であり、近年は春～夏に流行期を迎えています。2歳までにほぼ100%の乳幼児が感染し、発熱・鼻汁気管支炎・肺炎等の様々な症状が現れます。特に生後6カ月未満は重症化しやすいとされています。日本では毎年12～14万人の2歳未満の乳幼児がRSウイルス感染症と診断され、約3万人が入院しています。

RSウイルス感染症の治療

RSウイルス感染症の治療は基本的に対症療法となるため、予防が重要です。飛沫感染や接触感染を起こすため、マスクの着用、手洗いの徹底、アルコール製剤による消毒が必要です。重症化リスクが高い早産児や基礎疾患のある乳児には予防的に抗体製剤(シナジス、ベイフォータス)を投与しますが、健常児でも重症化することがあります。ベイフォータスは健常児にも投与できますが、自費のため非常に高額となります。

母子免疫ワクチンの開始

RSウイルス母子免疫ワクチンのアブリスボ筋注用は2024年1月に日本国内で承認されました。母子免疫ワクチンとは妊婦に接種することで母体の体内で病原体に対する抗体を産生し、その抗体が胎児に移行することにより出生後の乳児の感染症を予防するものです。アブリスボ筋注用は妊娠24～36週の妊婦が対象となり、生後6カ月まで乳児のRSウイルス感染症を予防すると言われています。妊娠28週以降でより効果が高い傾向にありますが、一方で投与後2週間以内に出生した場合は抗体の移行が十分ではない可能性もあり、投与する時期については個別にご相談いただくのが良いと思われます。市立病院でも6月より希望者に接種を開始しています。